St. Luke's International University Repository

看護として残すものと手放すものとはなにか，これからの看護教育を考える

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2025-02-14
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小山田, 恭子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.34414/0002000414

【第29回聖路加看護学会学術大会：シンポジウム B】

看護として残すものと手放すものとはなにか，これからの看護教育を考える

小山田恭子

医療提供の場が病院中心から地域に移行するなか，看護職の働く場所は多様化している．加えて，社会の変化や ICT（information and communication technology）の発達に伴い，看護の主要概念といわれている健康，環境，人間のとらえ方も再考が求められている．

こうした状況認識のもと，本シンポジウムではこれからの看護教育はどのような価値観を守りどのような価値観を手放したうえで新たなチャレンジを行うのかについて議論する機会をもちたいと考え，企画した．

はじめに，八木街子氏（自治医科大学看護師特定行為研修センター 准教授）より「看護教育と Technology-Enhanced Learning」というテーマでテクノロジーを活用した看護教育のあり方についての講演が行われた．八木氏はテクノロジーを用いた教育方略である PICRAT モデルを紹介し，テクノロジーを従来の教育手法の単なる置き換えではなく，これまでにできなかったことを実現するための方略として取り入れることの必要性を強調した．

また，いかに時代が変遷しても変わらない重要な教育内容である「対象の理解」をシミュレーターなどのテクノロジーの利用により教授していく方策などを紹介された．そして，自動的に記録が残るというテクノロジーの利点を生かし基礎教育と継続教育との連携を強化するなどの利点についても論じた．

続いての登壇者である加藤木真史氏（神奈川県立保健福祉大学 准教授）からは，「模擬電子カルテを活用した看護技術演習で実践力を高める」というテーマで，講演をいただいた．基礎看護学を教授する立場から，どのような技術をどのように教えるべきかなど，今回のテーマの最前線ともいえる内容であった．

教育の実践例として，医療環境の変化により実習で実践することが少なくなった与薬などの診療の補助技術を，教育用模擬電子カルテを活用して教授していることが報告された．具体的には，これまで手技の獲得に重点をおいていた内容を見直し，その技術を特定の患者に適用するために必要なアセスメント能力も同時に獲得し，患者に応じた看護技術の提供方法を検討するような授業例が示された．

最後の登壇者は西村礼子氏（東京医療保健大学 教授）であり，「DX 推進による看護基礎・継続教育をつなぐ学修成果・実践・看護成果」というテーマで講演をいただいた．社会からの期待と看護職自身の期待をすり合わせたうえで，看護職として生涯を通じて身につけるべきコンピテンシーの明確化およびそれらの段階的な到達度の設定と評価方法の明示の重要性について説明された．さらに，それらの実現に必要な DX の推進に関連して，AI などの多様な技術を用いた個別最適化された学習環境の提供や，教育の業務効率化の可能性などについて紹介があった．そして，こうした取り組みが教育機関全体の教育の質保証サイクルと連動するような教学マネジメントの必要性について論じられた．

３人のシンポジストによる講演やその後のディスカッションを通じて，教授する具体的な技術については見直しが必要ながら，他者との人間関係を結ぶ力，そして，臨床判断をするための基礎的な知識や思考過程は今後も変わらず教育の中心課題であることが確認できた．一方で，そのために取りうる教育方法については，従来の方法を改善するのではなく，新しいフレームワークを用いてゼロベースで再考する必要があることが示唆された．非常に刺激的でモチベーションが高まるシンポジウムであった．３人のシンポジストの先生方やご参加いただいたみなさまに感謝したい．

聖路加国際大学大学院看護学研究科